

受賞者：ふき活性化協議会

(大分県豊後高田市)

受賞年
平成18年



むらづくりの経緯

- ・ふき地区は、豊後高田市の南東部に位置し、地形は落川に沿って東西に広がる地域で、農業と林業（椎茸）が主な産業で総世帯数89戸、総人口233人の中山間地帯。地区の中央部に多くの観光客が訪れる国宝富貴寺がある。
- ・平成7年、UR対策による「ほ場整備事業」の導入にあたり、当協議会を設立し、2年間にわたり、ほ場整備後の集落農業のあり方や地区の将来像について検討。農業面では営農組合による協業化、観光面では「通過型観光」から「滞在型観光」への移行、環境整備などの目標を定めた地域ビジョンを平成9年に作成。

受賞当時

生産活動の特色

- 営農組合は平成16年に法人化し、「(農)ふき村」を設立。農地22.7haを借り受け、専任オペレーターが機械作業を担うことで、大幅な省力化と計画的な土地利用を実現。
- 消滅の危機にあった地域特産の「ぶんご合鴨」の生産を、(農)ふき村の有志が引き継ぎ、合鴨農法による生産拡大に努め、市内外の飲食店・旅館へ販売。合鴨米は、消費者に直接販売。また、女性のアイデアと余剰労力を活用し、農産加工直売所「蓮華」を設置。「ぶんご合鴨飯の素」「鴨ねぎみそ」を製造販売。
- 大規模茶園(14ha)を経営する(有)富貴茶園は、水田を(農)ふき村に委託したことで、本業に労働力が集中でき、従来と比較して収益性が向上し、1ターンの後継者を確保。



農産加工直売所「蓮華」



そば打ち体験



1ターン後継者

地域づくりの特色

- 平成16年に、地区の有志により富貴寺の近くに体験交流宿泊施設「旅庵路臺」(りょあん・ふきのとう)をオープン。宿泊や、地元農林産物にこだわった食の提供やそば打ち・納豆づくり等の加工体験を提供。



ふき地区

～受賞直後の効果～
・マスコミで取り上げられ、来訪者や視察が増加

・さらなる所得向上や地域活性化の意欲が高まる

・(農)ふき村は、近隣地区に出作を開始。

・「ぶんご合鴨」「合鴨米」「合鴨飯の素」「鴨ねぎみそ」は市の特産品として定着

・富貴茶園は、平成18年より荒廃地を活用した和牛放牧に着手

・旅庵路臺は農家レストランを併設し、交流人口が増加(年間約4,000人→約6,000人、旅庵路臺の利用者)

・H25に国東半島宇佐地域が世界農業遺産に認定

現在(令和4年)

評価ポイントの取組状況

- (農)ふき村は、より良い経営を目指すため、農作業の効率化等を図り、地域特産のそば、大豆、麦、ハトムギなどを作付に取り組み、作付延べ面積は受賞当時の約40haから現在では約55haとなっている。
- (有)富貴茶園は、茶業の傍ら、茶園裏手の荒廃した棚田等を開墾し、現在25haの放牧地で母牛(51頭)と育成牛、子牛も周年放牧し、平成27年度から、新規就農者5組7名、参入法人1社の育成に貢献している。
- 旅庵路臺では農家レストランを平成21年に併設。新型コロナウイルス感染症の影響はあるが、手打ちそばや地元産野菜中心の農家料理が好評で、年間宿泊者数1,200人と、地元の雇用と農産物の消費等へ寄与。

(農)ふき村の作付面積の推移

作目	作付面積(ha)		
	H17	H28	R2
水稻	13.8	21.7	8.91
麦	18	22.7	18.26
大豆	3.1	9	7.83
そば	5.8	17.8	7.22
なたね	-	8.4	-
ハトムギ	-	0.2	12.68
なばな	-	0.1	-
計	40.7	79.9	54.9



荒廃棚田を放牧地へ再生

今後の展開

- 今後も日本型直接支払交付金等の各種助成金を活用。新型コロナウイルス感染症の影響もあるが、地区内外との交流を深める中で地域ビジョンに掲げた取組みを引き続き進めていきたい。

受賞者： 中村^{なかむら}集落^{よこてし}（秋田県横手市）

受賞年
平成18年

日本農林
漁業振興
会会長賞

むらづくりの経緯

- ・中村集落では、昭和45年頃から花き、すいかの導入を始め、昭和50年のほ場整備を契機に、複合部門の拡大に向けた集落内の話し合いが活発化した。
- ・担い手である青中年層の負担となっていた祭礼等の集落活動について、集落の執行部的組織「村方議員会」と高齢者が企画調整を取り仕切る体制を整備し、若手農家が農業に専念して活躍できる環境づくりを実践するなど、複合経営の進展を集落ぐるみで下支えしている。
- ・集落内組織を統括する村方議員会を中心として、「共同と助け合いの精神」を活力源としたむらづくりを実践し、農業振興と集落活動保全の両立を図っている。

受賞当時

生産活動の特色

- 花き栽培等の導入による収益性の高い複合経営の確立
キクを中心に多品目を露地・施設で周年栽培し、首都圏等へ出荷しているほか、稲作の省力化による労働力の確保やすいか栽培にも取り組み、収益性の高い複合経営を確立している。
- ブラザー制度による栽培技術の向上と後継者育成
新規に花き生産に取り組む者に対し、ベテラン農家が3年間個別指導し、産地全体の栽培技術向上と後継者育成を図っている。
- 地域内労働力の有効活用と経営拡大
複数農家による共同雇用等の取組により、熟練技術を持つ労働力を地域内で有効活用することで、作業効率の向上を図り、経営規模の拡大に繋げている。また、女性が主体的に栽培管理を行っているほか、出荷作業では高齢者が活躍している。

地域づくりの特色

- 四季を通じて行われる祭礼の継承
四季を通じて年9回行う祭礼行事は、村方議員会が企画運営を担い、各戸へ役割分担しながら集落ぐるみで準備を進めている。
- 学校教育との連携による後継世代の育成
地元小中学校の「ふるさと学習」では、集落の優れた農業活動を生きた教材として取り上げているほか、中学生が十文字和紙で卒業証書を作成する活動を通して、伝統文化の継承に努めている。
- 女性の活動とゆとりのある高齢者の生活
花き農家の女性で組織した「十文字花の会」が花きのPRに励んでいるほか、高齢者は和紙細工等の多彩な趣味を仲間同士で楽しみ、生きがいとゆとりのある生活を送っている。

～受賞直後の効果～

- ・「共同と助け合いの精神」の大切さを再認識。
- ・中学生による十文字和紙の卒業証書づくりは、各種メディアに取り上げられている。



キクのほ場

現在（令和4年）

評価ポイントの取組状況

- 現在もキクを中心とした収益性の高い複合経営に取り組んでいる。
また、「ブラザー制度」も継続し、後継者育成を図っているほか、女性による主体的な栽培管理や高齢者による出荷作業なども継続的に行われている。
- 複数農家による共同雇用も行われているが、熟練者が高齢化し、労働力の確保が課題となっており、法人化に向けた動きも出てきている。
- 祭礼の企画運営は、現在も村方議員会が組織間の連携や調整を図りながら実施している。
- 十文字和紙での卒業証書づくりは継続しており、文化の継承に努めている。
- 「共同と助け合いの精神」は現在も脈々と受け継がれている。

今後の展開

- ブラザー制度により技術を習得した若い後継者が活躍することで、東北有数の花き産地として成長を続けていきたい。
- 高齢化や人口減少が進んでいるが、形を変えながらも、村方議員会を中心に祭礼等の集落活動を継続していきたい。